



総務省でいろんなオシゴトしてみませんか

経歴

平成18年 4月	総務省採用
	同 行政評価局総務課政策評価審議室
平成18年 12月	内閣官房行政改革推進本部事務局（公務員制度改革等担当）
平成19年 7月	総務省大臣官房総務課
平成20年 7月	内閣府規制改革推進室主査
平成22年 7月	総務省情報流通行政局情報流通振興課制度係長
平成24年 7月	同 情報流通行政局情報流通振興課課長補佐
平成25年 7月	現職

人事・恩給局参事官補佐

白石 牧子

Makiko Shiraiishi

総務省ってどんな仕事をしているところでしょう？早いもので入省して8年、これまで私自身が携わった仕事を少し御紹介させていただきます。

今の仕事

現在私は国家公務員の人事評価制度を担当しています。意外？当然？今は国家公務員も、能力・実績主義。職員の給料の決定や昇進管理も人事評価に基づいて決められています（そしてきちんと差が付くようになっていきます）。行政機能・政策効果を向上させるためには、国家公務員一人一人が最大限に能力を発揮し、組織パフォーマンスの向上につなげていくことが重要です。そのためには、能力と実績に基づく人事管理が重要な役割を果たします。しかし、人事評価制度というのは唯一絶対の正解があるものではなく、試行錯誤を重ねていくことが必要です。

現在は人事評価制度導入から5年目を迎え、民間や諸外国の取組も参考にしながら、どうしたら人事評価がその役割をさらに果たすことができるのか、制度・運用の改善に取り組んでいます。人事評価制度を含め、国家公務員制度は、直接国民に影響するものではありませんが、約30万人の国家公務員の働き方に関わるものであり、行政全体、そして国に大きな影響を与えるもの。その責任は重く、それだけやりがいのある仕事です。

これまでの仕事

さて、総務省は様々な業務が経験できる職場です。私自身、前職は電子書籍などデジタルコンテンツを世の中に広めるための仕事をしていました。例えば、世界中どこでも日本語の電子書籍が読めるようにするために、電子書籍でも縦書きやフリガナなどの日本語表現が可能となるためのプロジェクトを進めました。

また、東日本大震災発生後は、国立国会図書館、被災自治体、大学、NPO、報道機関等と協力し、震災の記録と教訓を風化させず後世に継承していくため、震災に関するあらゆる記録・資料等をデジタルコンテンツとして記録し、国内外に発信していくためのポータルサイト「NDL東日本大震災アーカイブ」を構築しました。被災地にも何度も足を運び、たくさんの人たちと協力し、多くの時間をかけて出来上がったものであり、印象深い仕事の一つです。

ちなみに、今とは全く違う仕事内容ですが、多種多様な業務に携わる国家公務員に関する制度を担当している現職にも、このときの経験はとても役立っています。逆に、今の仕事も、これからのキャリアパスの中で、きっと活かされることでしょう。無駄な仕事・経験はないのだと思います。

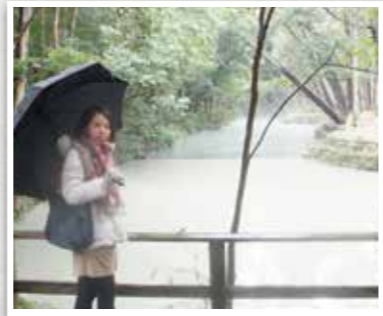
総務省での働き方

どんな風に働いているかにもご関心がありますよね。総務省では、本人が希望すれば、子育てしながら仕事を続けていくことは、当たり前になっています。実際、多くの職員（女性

はもちろん、イクメン職員も多くいらっしゃいます）が仕事と家庭を両立しており、私自身も、これから来たる子育てと仕事の両立というステージに、安心して臨めると考えています。

最後に

どんな仕事に就くかということは、人生の中でも大きな選択の一つです。真剣に悩み、選んで欲しいと思います。その選択肢の一つとして総務省はいかがでしょうか。一緒に働けることを楽しみにしています。



高尾山と伊勢神宮にて。オフの時間を楽しむことで仕事もがんばれます。



経歴

平成20年 4月	総務省採用
	同 行政管理局企画調整課
平成21年 7月	行政管理局企画調整課 併任 行政手続・制度調査室
平成22年 7月	同 総合通信基盤局電気通信事業部事業政策課主査
平成23年 3月	同 総合通信基盤局電波部電波政策課係長
平成24年 8月	現職

行政管理局企画調整課係長

成相 寿一

Toshikazu Nariai

総務省の役割

行政が「国民にとって真に必要なことを、効率的・効果的に行う」ことは、行政における普遍的な価値の一つです。特に近年、少子高齢化等への対応としての社会保障制度改革、国の防災政策、安全保障政策の見直し、科学技術政策の強化など、国が取り組むべき課題は変化・増大する一方、国の財政状況は依然厳しく、行政の活用できるリソースに限られている状況に鑑みても、あたりまえのようですが、この価値を実現していくことが非常に重要なのです。

総務省では、公務員制度改革、組織・定員の管理、電子政府の推進、業務見直しの推進、行政評価など、各府省の所管行政に広く係わる分野の企画立案を通して、これを実現していくことを任務の大きな柱の一つとしています。

国の行政のカタチを考える

ではどのように実現していくのか。具体的なお話として、私の所属する行政管理局の行う国の組織・定員管理の取組について簡単にご紹介します。

毎年度、各府省から行政管理局に対し、組織・定員の要求があり（例えば、「～という行政ニーズに対応するため、〇〇課の新設を認めて欲しい。」「今度政府として〇〇に取り組むことになったので、そのために〇人の増員が必要だ。」といったようなもの）、これに

国の行政のカタチを考える仕事

対して、「そもそも国の行政で取り組むべき課題なのか」、「それを実現するための組織を作ったとして、仕事が上手くまわるのか」、「例えば行政の電子化を推進することで、業務の効率化が図れ、既存の体制で対応することも可能になるのではないか」（代替可能性）、「一方で他の行政分野においては必要性が低減しているの、組織・定員を廃止・縮減すべきでないか」（組織膨張の抑制）などの観点から審査を行っています。

この過程で難しいのが、「効率的」であることを求めるあまり、その結果国民生活に支障が出るようなことがあってはいけないということ。最適な解を、政策の方向性やその背景を踏まえ、各府省と議論を重ね、時には相手省とともに悩みながら現実的なかたちにしていく作業なのです。

「熱い思いを持つのは当然だが、頭は常にクールでいなければならない。」、これは私が配属された時、当時の上司から言われた言葉です。「クール」でいるということは、状況を的確に分析し、現実的な解に向けて両者を擦り合わせていく際に求められる姿勢であると、私自身理解しています。

総務省の魅力

ちょうど7年前、私も皆さんと同じように就職活動をしていたわけですが、就職先を選ぶにあたって漠然と考えていたのが、「人の役に立てる仕事であって、自分がやるべきであると強く思える課題のある場か」、「一緒に働きたいと思える仲間恵まれた環境か」ということでした。これをお読みの皆さんも多かれ少なかれこのような気持ちをお持ちなので

はないでしょうか。

総務省という場で6年間働いてみて、私はこの選択は正しかったと確信しています。特に「自分がやるべきであると強く思える課題」に関して言えば、上述の仕事のほか、行政不服審査法の改正、周波数オークション制度の立案、電気通信分野における公正競争の実現など、各府省の行政活動の基盤となるようなものから、直接国民生活に関わるものまで、多くのチャレンジングな課題に携わることができました。総務省という霞ヶ関の中でも特に幅広い任務を課せられている組織であるからこそ、自身の能力を発揮する場は多様です。

あなたのやる気を引き出し、持てる力をぶつけたいと思える課題と、そのような課題にともに取り組みたいと思わせる魅力的な人材を、是非確かめに来て下さい。



打合せ風景